オスラーの胸像

　ある日、看護婦から「数人の患者さんを近くの“蒲原まつり”に連れて行きたいので外出の許可をいただけませんか」との申し出を受けた。昔ながらの屋台が並び植木市などもあって、たくさんの人で賑わうそこには、子どもにも大人にも懐かしい夏祭りがあった。患者さんにとって、入院中に祭りに出かけることなど考えられなかったことだろう。

　２～３時間の外出許可に、非番の看護婦に連れられ子どものように喜んで出かける患者さんたちの後ろ姿を見送った。治療のために、吐き気・嘔吐・脱毛等、副作用に苦しみ悩む人たちであった。

　入院生活が長くなると、家のこと、残してきた家族のこと等で落ち込んでしまう人、怒りっぽくなる人、固く口を閉ざしてしまう人がおり、なかなか心を開いてくれようとせず、診療において困ることも少なくないのである。

　そんな時、ほんの短い時間であっても看護婦たちの粋なはからいに内心頭が下がる思いであった。ふと、病院(新潟市民病院)の玄関前庭に建つ＜オスラーの胸像＞が脳裏をかすめた。

　オスラーは１８４９年カナダに生まれ、アメリカのペンシルバニア大学、ジョーンズ・ホプキンス大学、イギリスのオックスフォード大学の内科の教授を歴任し、医療は科学と技術と人道性を一体として行うべきもので、医療人は患者の人間性を尊重し、その訴えを聞き、病める人に対して全人的医療を目指さなければならないと説いている。

　＜医学は患者と共に始まり、患者と共に在り、そして患者と共に終わる＞というオスラーの言葉が刻まれた文鎮が当院の全職員に配布されている。そんな精神の病院発展の願いが込められて。

　さらにオスラーは、医師と違って２４時間患者さんと接する看護婦に対しても「皆さんがプロとしてやることができても、皆さんができない看護を患者さんの家族がやっている。自分たちにできない看護を家族の人にやってもらうよう彼らを病室に入れるように」とも述べている。

　外来で、退院した患者さんから「先生も一緒に山登りしましょう」と誘いがあった。長い入院生活を終え、外来通院となった患者さん数人と、病棟勤務の看護婦が計画し、実施したことを後で教えられた。

　大事な休暇を利用して、人知れない所で患者さんと一緒に過ごし、励ましている姿を思い浮かべた時、外来の机の上だけの医療に明け暮れている自分につくづく無力感を覚えながらも、頑張らなければならないと思う。